

令和 8 年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参 加 会 議： 第 75 回会議（三分野合同）

所属機関・部局・職名： 京都大学大学院理学研究科 化学専攻 博士後期課程 2 年

氏 名： 西口 大智

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名（3 名程度）を挙げ、記載してください。〕

ノーベル賞受賞者の講演は、ご自身の最先端の研究内容のご紹介にとどまらず、ご自身の人生哲学や、社会や若手研究者に向けたメッセージまで多岐にわたった。全体的に、受賞後の現在であっても、現役の研究者として異分野への拡張や新たな応用研究に挑戦し続ける姿が印象的であった。

“Lesson from Life”と題された Synergy Talks においては、ノーベル賞受賞者がこれまでの数々の成功や失敗を含む自身の経験から得た、直接的かつ教訓的なメッセージを聴く貴重な機会となった。Tim Hunt 氏（2001 年生理学・医学賞）は、「良い研究課題を見つけよ」「好奇心をもて」といったシンプルながらも核心を突く具体的なアドバイスを、巨匠としての含蓄のある言葉で丁寧に語りかけてくださった。別のセッションにおいては、Ben Feringa 氏（2016 年化学賞）が「楽観的であれ」などと強い口調で若手にメッセージを投げかけていた姿が記憶に強く残っている。最初の講演であった Katalin Karikó 氏（2023 年生理学・医学賞）の講演も印象深いものであった。幼少期からの人生を振り返りながら、数々の困難な経験をどのように乗り越え、それがどのように発見や現在の研究に繋がったかを、ユーモアを交えながら魅力的に講演されていた。

各講演における質疑応答の時間において、若手研究者に混ざってノーベル賞受賞者自身もマイクの列に並び、他の講演者に質問をぶつけていたことも印象的である。語り手として壇上に立つのみならず、ノーベル賞受賞後もなお探求心をもち、自然科学を推し進める当事者として議論に加わる姿が印象的であった。

巨匠たちの尽きることのない探求心と、分野の垣根を越えて生涯学び続けようとする真摯な姿勢に感銘を受けた。今後は、自身の専門分野の枠にとらわれることなく他分野の知見も積極的に吸収し、困難な課題に対しても前向きに挑戦し続ける姿勢を、自身の研究活動の基盤として生かしていきたい。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカッション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

インフォーマルな場でお話しする機会を得たノーベル賞受賞者は、どなたも非常に誠実に温かく、若手研究者とも対等な目線で熱心に議論を交わして下さった。偉大な研究者でありながら気さくに接して下さり、研究の悩みや今後のキャリアについて、終始若手研究者を勇気づけ励ます言葉をかけていただいたのが印象的であった。

夕食において、Morten Meldal 氏(2022 年化学賞)と隣席する機会を得た。Meldal 氏は自らテーブルを回って若手一人一人に自己紹介をするような非常に気さくな方であった。具体的な研究内容のディスカッションから今後のキャリアパスにわたる幅広い話題について、親身に意見をいただくことができた。自身の経験を交えながら、研究活動の中で「変化を恐れないこと」の重要性を力説していただき、さらに私の研究の方向性についても具体的なアドバイスをいただくことができ、今後の研究活動において直接的な指針を得る機会となった。

また、昼食時に同卓できた Dan Shechtman 氏(2011 年化学賞)からは、「研究や人生において本当に重要な出来事は偶然やってくるものであり、自分では決められない」との旨の深いアドバイスをいただいた。ご自身の準結晶の発見は当時の常識では誰も想像しなかったことだったという説明とともに、周囲の反対にあっても既成概念にとらわれず、自身の信念をもって地道に研究を続けることの重要性を説いて下さった。

Barry Sharpless 氏(2001 年化学賞・2022 年化学賞)と話をする機会を得た際には、2001 年のノーベル賞は香月勲氏(共同研究者だった当時の博士研究員)に与えられるべきだったと何度も熱く語られていた。ご自身はノーベル賞をもらえるとは思わなかったと振り返り、ノーベル賞という栄誉に頓着せず、ただ純粋に科学を愛する無欲な姿も印象的であった。

これらの対話を通じて、研究における「変化」や「予期せぬ結果」をネガティブに捉えるのではなく、むしろ新しい発見のチャンスとして前向きに楽しむマインドセットを改めて得ることができた。今後の研究活動においては、あらかじめ描いたストーリーや目先の成果のみに固執するのではなく、予期せぬ実験結果にも素直に向き合い、自身の直感を信じて粘り強く探求する姿勢を貫きたい。また、ノーベル賞受賞者たちが若手に対して見せてくれた真摯で謙虚な対話の姿勢を深く胸に刻み、彼らのように周囲を鼓舞し、エンパワーできるような人間性をもった研究者を目指したい。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

会議全体を通じて、海外での研究生活や外国人研究者のキャリアについて直接話を聴くことができ、大変勉強になった。多くの参加者が高いモチベーションをもって研究に取り組む姿に触れて大いに刺激を受けるとともに、研究成果の応用や社会実装に関心がある参加者が多いのが印象的であった。

同世代の参加者たちがもつ、物怖じせずに自身の研究の社会的意義を語り、議論へと飛び込んでいく積極性に驚くと同時に、それに対抗し切磋琢磨していきたいという気持ちを抱いた。今後は、自身の研究が社会にどう貢献し得るかという視点を常にもちながらテーマを設定し、国際学会や海外での研究機会に積極的に挑んでいきたい。多様なバックグラウンドをもつ研究者と臆せず議論を交わせる、グローバルな発信力と行動力を培っていく所存である。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

幅広い分野で活躍されている参加者がいらっしやり、分野間での研究手法や考え方、キャリアの違いを知る機会となった。対話の中で基本的なことから考え直させられることも多く、自分自身の研究活動が相対化されるとともに、新たな視点をもつことができた。どの参加者も高い意識、モチベーションをもっていらっしやり、国内外問わず活躍の場を見つけていらっしやる姿が印象的であった。また、海外での研究経験や、キャリアパス、実生活の悩みなどについて具体的な情報交換ができ、将来の進路を考える上で大いに勉強になった。高い志をもつ日本からの参加者との出会いは、「自分も世界を舞台に活躍したい」という大きなモチベーションにつながった。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

特に良かったと思うプログラムは、Nobel Hour、Laureate Lunches、Bavarian Eveningなどのイベントである。Nobel Hour は参加者がノーベル賞受賞者に質問をぶつけ、議論をすることができるプログラムである。1 時間にわたり 1 人の受賞者の話を聴くことができる数少ない機会であり、受賞時のエピソードから研究内容、人間性まで幅広くかつ深く知ることができる良い機会であると思う。Laureate Lunches はノーベル賞受賞者 1 名と若手研究者 10 名程度で昼食をとる企画である。他のプログラムと異なり、少人数かつ静謐な場で受賞者と議論することができる機会であり、研究哲学や人柄にまで触れられる貴重な機会であった。Bavarian Evening や International Evening はノーベル賞受賞者と若手参加者が共に夕食を囲む機会であった。これら夕食イベントにおいても、ノーベル賞受賞者や海外の参加者と落ち着いて話すことができ、多くの知見が得られるととても有意義な時間であったと思う。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット〔具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。〕

ノーベル賞受賞者や若手研究者との交流を通じて、研究活動に対する視野が広がるとともに、モチベーションが大きく高まったことが最大のメリットである。一般的な話であっても、ノーベル賞受賞者や若手研究者から直接アドバイスいただけたことは、今後研究活動を行っていく上で大きな励みになった。また、研究内容について議論する中で、共同研究についての具体的な相談をしたり、実験のアドバイスを受けたりとすることができた。異分野の研究者との交流ならではの共同研究のきっかけであり、研究活動における実際上の大きなメリットになった。博士研究員等として将来の研究機会を具体的に提案いただく場面もあり、今後の研究活動に対する具体的なイメージにつながった。交流できた参加者の多くとは連絡先の交換もできたため、今後も必要に応じて交流を重ねることができることもメリットである。

**7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。**

リンダウ会議において知り合った海外の研究者を通して生まれた、国際的な共同研究や、国内外での研究者の交流のきっかけから、日本国内の自然科学研究や社会への還元ができると思う。博士研究員等として日本で研究することを希望する参加者もあり、研究環境やキャリアについて意見交換できたことは、日本人参加者や将来日本で研究する海外の参加者にとって直接的なメリットであったと思う。また、海外の研究環境やキャリアについての知識を多く得られたため、この後の研究活動においてそれらの経験から得られた教訓を体現することで、国内外での研究者の交流や国際共同研究の推進に貢献できると思う。

**8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ**

ノーベル賞受賞者は全員が常に会場にいらっしゃるわけではないので、交流の機会を逃さないよう一層注意するとともに、積極的に交流の機会をもつことが重要であると思った。三分野合同会議は良くも悪くも幅広い分野の参加者がいるため、全般的に話の内容が一般的なものになることが多いように感じた。また、特に異分野の方の話は、想像以上に難解に感じられることが多かったため、可能な範囲で「予習」していくことでより楽しめるのではないかなと思う。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)